



Title	『ユートピア』の周辺：モアの取材源
Author(s)	渡辺，金一
Citation	一橋大学社会科学古典資料センター年報，4：3-5
Issue Date	1984-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/5554
Right	

『ユートピア』の周辺 —モアの取材源—

渡 辺 金 一

『ユートピア』およびユートピア文学を主題とした数多くの研究のどれ一つとして、また、トマス・モアの名著の取材源についての大変詳しい数多くの探究のどれ一つとして、エッセネ派(数的に劣ったテラペウタイを含む)とユートピアとのむすびつきの可能性を指摘しなかったし、誰も、モアが或る程度までプレトンの《ペロポネソス・ヴィジョン》—かれの、マヌエル・パライオロゴスおよびテオドロス宛での建白書をこう呼んでかまわないだろう—および、おなじかれの『法律』から、示唆をうけた可能性を見のがして来た。」この書き出しではじまる、インド学の碩学ダンカン・デレットの、虚を衝く提言¹¹⁾は、素人判断で恐縮だが、どうも日本のモア研究に未だ紹介されていないようなので、ここで取り上げることにした。とはいっても、それは、私の専門の関係上、デレット論文中の、モアとの関わりにおけるプレトンであって、『死海寫本』の発見で一躍脚光を浴びたところの、ユートピアを地でゆくような特異な教団生活をくりひろげるエッセネ派問題—デレットによれば、修道院制度、ならびに、俗人の修道院秩序との関わりに、並々ならぬ関心を寄せていたモアは、キリストの時代の東地中海世界のユダヤ教を扱った同時代の二人の作家、ヨセフスとフィロの同派に関する記事を、チューダー朝期の手書本で、ないし、すでにその頃出まわっていた印刷本で、読んでいたであろう、という—については、その道の専門家に委ねたい。

さてそのプレトン—本来の名前は Georgios Gemistos であり、Plethon は、その『法律』公刊にあたってかれが採用した偽名だといわれているが、この偽名の方が本名よりも世間で通用してしまっただけでなく、gemistos も plethon も、「充ちた」を意味する同義のギリシャ語だが、前者は民衆語に、後者はアッティカ風の教養語に属している—については、日本では馴染みの薄い人物のように思われるので、通り一遍の紹介だけは、しておいた方がよさそうである。¹²⁾

ビザンツのプラトン主義哲学者であるプレトンは、1360年頃コンスタンティノーブルに生まれ、長らくオスマントルコ宮廷にあって、ツァラトストラおよびイスラムについて詳しい知識を得た。コンスタンティノーブルで主張した自説が巻きおこした波紋で1393年、かれはビザンツ帝国領ペロポネソスの中心地ミストラに移り、そこの宮廷を中心に、プラトン主義哲学を講ずるとともに、それに基づいた多神教的宗教を説いた。1438～39年、東西キリスト教会の統一問題を議するフェララ・フィレンツェ宗教会議に皇帝の相談役として出席するためにイタリアに渡った際、ビザンツ教養人の代表格としてイタリアのヒューマニストたちによって熱狂的にむかえいられ、これが、のちにコシモ・デ・メディチの手でフィレンツェにプラトン・アカデミーが創設される(1462)機縁となった。宗教会議終了後ペロポネソスに戻ったプレトンは、その高齢からは想像も出来ないような創造力を傾けて、『法律』の完成をはじめとし、数々の著書をあらわし、コンスタンティノーブル陥落(1453)の前年ミストラで世を去った。かれの遺体は同地に埋葬されるが、その14年後、遺骨はイタリアのリミニのまちに運ばれる。狐の顔と獅子の顔を一身にあわせたところの、マキアヴェルリの画くルネッサンス独裁者の権化、リミニの小支配者シジスモンド・パンドルフォ・マラテスタは、ヴェネチアのコンドティエレとしてペロポネソスでオスマントルコ軍と戦っていたが、そのかれが、1466年故郷のまちに帰還するさい、死後もなお名声の朽ちないこのビザンツ末期の最大の哲学者の墓を掘り起して、その骨を持ち帰ったのである。かれはそれを、自ら大改装させたばかりの、初期ルネッサンス建築の代表、あのテンピオ・マラテステアノに安置した。こうしてプレトンは、死してなお、リミニのルネッサンス宮廷に花を添えることにな

った。その墓碑銘はこうきざまれている、Gemistus Byzantinus philosophus suo tempore princeps と。

プレトンの基本的な考えは、伝統的なキリスト教世界観の転換をはかり、古典ギリシアへの復帰を国是として、イスラム以下の諸勢力に対抗しようとする点にあった。そこから生れたのが、さきの二建白書と『法律』である。⁽³⁾

ビザンツ皇帝マヌエル二世パライオロゴス（1391—1425）宛と、同帝の息子で、当時モレアとよばれたビザンツ領ペロポネソスの代官^{デスボテース}のテオドロス（1407—1443）宛の二つのプレトンの国家改造建白書（といってもそれが対象とするのはモレアである）の時間的前後関係は議論が分れるところだが、いずれにせよそれらはあまり間を置かずに書かれ、その時期は、すでに14世紀末に始まったオスマントルコ軍のモレア侵入が、アンゴラの戦い（1402）でティムールから蒙ったトルコ側の壊滅的打撃のため一時停止し、ムラド二世のスルタン即位（1421）を俟って侵入が再開するまでの20年程の小康状態にあっていた。この状況のもとで両建白書とともに、古典ギリシア発祥の地モレアを本拠地として、ローマ帝国を立て直すという同一問題と取り組み、そのための、ほぼ同じ内容の改革案を提示している。そのめばしい項目を挙げると、つぎのようである。住民を職業的に二分しての、軍事・経済分担体制；国富の、労働提供者、資本提供者、公共奉仕者への分配；国家財政に寄生する修道士への批判；全土の国家帰属原則；刑法改正（死刑、体刑の廃止と、それにかわる、受刑者の公共労働奉仕）；貨幣・租税制度の改正と、对国家賦役、貨幣租税、実物租税という三種の对国家義務の、最後者への一本化^{こうしゅ}；外国貿易政策（国内生産物による可能な限りの需要調達原則、鉄・武器輸入の為にのみ木綿輸出許可、高価な外国産の羊毛輸入禁止）と、それに応じた輸出・輸入関税政策、公共奉仕者の私的営利活動禁止、等々。

これにたいして、プラトンの同名の作品を手本としてプレトンが、その晩年に執筆した『法律』の方は、かれの死後、オスマントルコ・スルタンのもとでの初代コンスタンティノーブル総主教ゲンナディオス・スホラリオス（1453—1456）による焚書で大部分が失われ、その際保留された、目次を含む冒頭と、本文では、先立って発表され、後に『法律』に収められた、「運命について」の部分とが、断片として今日に伝わっているにすぎない。いずれにせよ、『法律』を通じて提示されているのは、独自の礼拝と典礼（そのためには、太陽暦と大陰暦とを組合せた特別の暦が用意されている）⁽⁴⁾をもった、一つの新しいギリシア宗教なのである。

プレトンの作品のおよそ以上のような内容と、モアの『ユートピア』の記事の間にみられるおどろくべき対応を、デレットは、ペロポネソス（ペロプスの島）と人工の島ユートピアという地理的關係から説きはじめて、そのうえに建てられた社会（それはいずれの場合でも、高度にコントロールされた一社会である）でくりひろげられる生活のさまざまな側面にわたって指摘する。『ユートピア』の読者なら、対応が奈辺にあるかは、上記の簡単なプレトン紹介からでもすぐお判りいただけるだろうと思われるので、ここではふれない。

モアは果してプレトンの作品を自ら繙いたのだろうか。デレットは、その直接の証拠がないことを認めながら、それは確かであり、いずれにせよ、ピコ・デルラ・ミランドラ（その *Examen Vanitatis Doctrinae Gentium. IV, cap. II, p. 1025* にはプレトンへの言及がある）を介して、モアはプレトンを知っていただろう、としている。ビザンツ帝国末期、ことにその滅亡後におこった多数のビザンツ知識人の西方訪問・移住・亡命がこの地のヒューマニストたちの間によびおこした興奮と熱狂を想えば、ダンカンの推測はけっして荒唐無稽の思いつきではない。⁽⁵⁾ おそらく、その屈折したあらわれが、モアのユートピア人の、あのギリシア語学習熱かもしれない。

モア理解にはいろいろの道があっていると思う。私がしたいのは、モアを、その生きていた時代に即しながら、たとえば、そのかれがおこなった取材活動の範囲はどんなものであったかを考えてみるような試みである。

註

- (1) J. Duncan M. Derrett, Gemistus Plethon, The Essenes, and Mores Utopia. 《*Bibliothèque d'humanisme et renaissance*》27 (1965) pp. 579-606.
- (2) F. Masai, *Pléthon et le platonisme de Mistra*. Paris 1956 および, Ch. Soldatos の『ゲオルギオス・ゲミストス・プレトン この哲学者の政治論, ミストラ, および, かれによるフィレンツェのプラトン・アカデミア創設考』アテネ 1973 (現代ギリシア語) が (筆者未見), 基本的プレトン研究文献である。
- (3) 二建白書のテキスト収録はつぎのとおりである, *Palaiologeia kai Peloponnesiaka*, ed. Sp. P. Lampros. III (Athens 1926), pp. 246-265; IV (1930), pp. 113-135; Migne P. G. CLX, pp. 821-866. A. Ellissen, *Analekten der mittel-und neugriechischen Literatur*. IV (Leipzig 1860) は, ギリシア語テキストのほか, 独訳と詳しい註釈を収めている。E. Barker, *Social and Political Thought in Byzantium*. Oxford 1957, pp. 198-212には英語の部分訳がある。『法律』のテキストおよび仏訳が Pléthon, *Traité des Lois*, ed. C. Alexandre, trad. fran. A. Pelissier. Paris 1858., 英語抄訳が E. Barker, *op. cit.*, pp. 214-219.
- (4) Milton V. Anastos, Plethon's Calender and Liturgy. 《*Dumbarton Oaks Papers*》IV (1948) pp. 183-305.
- (5) だからといって, モアがプレトンを書き写した, などとダンカンは言っているわけではない。かれが続いて取り上げるのは, プレトン, ピコ, モア三者をつなぐものとしての, モア自身が『ユートピア』冒頭の, ユートピア・アルファベット四行詩で, ユートピアの理念としてかかげている *gymnosophistai* のあの理念なのである。インドのブラフマンの一派であり, 森林中で裸のまま生活するこの禁欲行者は, ギリシア古典ですでに馴染み深い存在であり, 中世では, とくにアレクサンドロス大王伝説を通じて, ビザンツ人に知れわたっていた。これについてのダンカンの興味ある叙述は, 本稿ではとりあげることが出来なかった。モアとの関わりで私自身の問題としたいのは, インドから西ヨーロッパに亙るひろがりをもった, アレクサンドロス大王伝をも含んだ中世民衆文学の世界との, 西ヨーロッパ・ヒューマニストたち — それは, ボッカチオでも, チョーサーでも, ラブレールでもよい — の関わりである。 (一橋大学経済学部教授)

『気球航空会社の設立』(1790年) — フランクリン文庫の一冊 —

津 田 内 匠

この秋フランス留学に出かけた T 君がパリで一枚の写真を撮って送ってくれた。それはすでに見なれたセーヌ右岸の市街地の空に, 色鮮やかな熱気球が10コもぶかぶかと浮んでいる珍しい光景のものであった。「富士には月見草がよく似合う」ように, パリには熱気球がよく似合うようである。いずれモンゴルフィエ兄弟の熱気球の記念の年にちなむ催しの一つであったのだろう。

リヨンに近いアンノネの製紙業者モンゴルフィエの息子たち, ジョゼフ・ミシェルとジャック・エチエンヌが, 暖炉にくべた紙が軽く舞い上るのにヒントを得て (と言われているのだが), 絹の裏にお手のものの紙をはった気球を, 焚火で暖めた熱気で空中高く飛ばす実験に成功したのが1783年6月4日のことである。この報は直ちにパリに伝えられ, パリでも科学アカデミーのシャルル教授が絹にゴムをひいた気球に水素をつめて飛ばしている。これが8月27日のことである。見物料までとった最初の公開実験であった。気球の浮揚実験は早くもモンゴルフィエールと呼ばれる熱気球とバルンと呼ばれるガス気球の二手に分れて競争の形となったのである。エチエンヌ・モンゴルフィエはこの後ヴェルサイユ宮殿の前庭でルイ16世臨席の天覧の実験に成功し, さらに11月26日にはブローニュの森で二人の飛行士を乗